

筒井筒『伊勢物語』／沖つ白波『大和物語』

◇次の【文章Ⅰ】は『伊勢物語』の一節である。【文章Ⅱ】は『大和物語』の一節である。これらを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。

【文章Ⅰ】

昔、¹田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、大人になりければ、男も女も恥ぢかはしてありけれども、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでないありける。さて、この隣の男のもとより、かくなむ。

²筒井筒井筒に、³かけしまるがたけ、⁴過ぎにけらしな妹見ざるまに女、返し、

^①くらべし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずして誰か上ぐべき

など言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。
さて、年ごろ経るほどに、女、親なく、たよりなくなるまに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内国高安の郡に、行き通ふ所出で来にけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へる気色もなくて、出だしやりければ、男、異心ありてかかるにやあらむと思ひ疑ひて、前裁の中に隠れあて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白波。たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ
と詠みけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へも行かずなりにけり。まれまれ、かの高安に来て見れば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、⁶けこの器物に盛りけるを見て、心憂がりて、行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、君があたり見つつを居らむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも

と言ひて見出だすに、からうじて、大和人、「来む。」と言へり。喜びて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る
と言ひけれど、男、住まずなりにけり。

【第二十三段】

【文章Ⅱ】

昔、大和の国、葛城の郡に住む男女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはして住むに、この女、いとわろくなりければ、思ひわづらひて、限りなく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、行けばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。

かく、¹にぎははしき所にならひて、来たれば、この女、いとわろげにてあて、かくほかに歩けど、さらになたげにも見えぬなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地には限りなくねたく心憂く思ふを、しのぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「いね。」と言ひければ、わがかく歩きするをねたまで、²異わざするにやあらむ、さるわざせずは、恨むこともありなむなど、心のうちに思ひけり。さて、出でて行くと見えて、前裁の中に隠れて、男や来ると、見れば、³端に出でて、月のいとみじうおもしろきに、⁴頭かいけづりなどしてをり。夜更くるまで寝ず、いといたうち嘆きてながめければ、人待つなめりと見るに、使ふ人の前なりけるに言ひける、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みければ、わがうへを思ふなりけりと思ふに、いとかなしうなりぬ。この今の妻の家は、竜田山越えて行く道になむありける。かくてなほ見をりければ、この女、うち泣きて伏して、金椀に水を入れて、胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入れる。見るにいとかなしくて、走り出で

【文章Ⅰ語注】

- 1 田舎わたらひしける 地方暮らしをしていた。
- 2 筒井筒 筒井の井筒。「筒井」は、筒のように丸く掘った井戸。「井筒」は、地上に造った井戸の囲い。
- 3 かけし (高さを) 測り比べた。
- 4 過ぎにけらしな (井筒の高さを) 越えてしまったようですね。
- 5 たつた山 竜田山。
- 6 けこ 家子。家族と使用人を合わせた一族。

【文章Ⅱ語注】

- 1 にぎははしき 裕福な。明るく華やかな。
- 2 異わざ 別の行為。ここでは、女が別の男を通わせること。
- 3 端 縁側。
- 4 頭かいけづり 髪の毛を櫛で梳かす。
- 5 ふてつ 捨てた。
- 6 つと じつと。ぴったりと。
- 7 つつましく 気がひけて。遠慮がちに。
- 8 おほきみ 王。ここでは、皇族の血を引く者を指す。

て、「いかなる心地し給へば、かくはし給ふぞ。」と言ひて、かき抱きてなむ寝にける。かくてほかへもさらに行かで、つとゐにけり。

かくて月日多く経て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女の思ふこと、いといみじきことなりけるを、かく行かぬをいかに思ふらむと思ひ出でて、ありし女のがり行きたりけり。久しく行かざりければ、つつましく立てりける。さて垣間めば、我にはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり、手づから飯盛りをりける。いといみじと思ひて、来にけるままに、行かざりにけり。この男は、おほきみなりけり。

〔第四百九段〕

問1 傍線部 a～c の解釈として最も適当なものを、次の各群の A～オのうちから、それぞれ一つずつ選べ。

a 本意のごとくあひにけり

A もとからの望みに反して結婚した

I もとからの望みのおりに結婚した

ウ 望みのままに行き来できるようになった

E 本心を隠して会うようになった

オ 本心から愛し合うようになった

A みじめな暮らしも耐えることができる

I みじめな暮らしから抜け出そうではないか

ウ みじめな暮らしを続けるのだろう

E みじめな暮らしを続けていくのだろうか

オ そこにいた女を連れて行った

I そこにいた女が先に立って行った

ウ かつての女のもとからやって来た

E かつての女の伝手を頼った

オ かつての女のもとに行った

c ありし女のがり行きたりけり

問2 傍線部①「くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずして誰か上ぐべき」の和歌の説明として適当でないものを、次の A～オのうちから一つ選べ。

A 「くらべこし」は、女が男と髪を長さ比べ合ってきた親しい関係であることを示している。

I 「振り分け髪も肩過ぎぬ」は、女の髪が伸びるほど月日が過ぎたことが暗示されている。

ウ 「振り分け髪」を「上ぐ」とは、女が成人したということを表している。

E 「君ならずして誰か上ぐべき」は、「君」である男に対して、女が結婚してくれないことの恨みを訴えている。

オ 「君ならずして誰か上ぐべき」は反語であり、女が男の結婚の申し出を承諾したことが分かる。

問3 傍線部②「前裁の中に隠れあて、河内へいぬる顔にて見れば」とあるが、男がこのようにした理由の説明として最も適当なものを、次の A～オのうちから一つ選べ。

A 女が自分を河内の女のもとに平気で送り出すのは、女のもとに別の男が通ってきているからではないかと疑い、その真偽を見きわめようと思ったため。

I 女が河内の女に対して嫉妬心をあらわにしないことから、女が経済的に自立する手立てを見つけたせいだと考え、女の生活ぶりを確かめようと思ったため。

ウ 女が河内の女のもとへ行こうとする自分を止めようと思わないのは、女が貧しいために引け目を感じているせいだと思い、女の様子を見守りたいと思ったため。

E 女が自分に対する愛情を失ってしまったのは、自分が河内の女のもとに通い始めたからではないかと案じ、その予想の適否を明らかにしようとしたため。

オ 自分が河内の女のもとに通うようになって、女が自分に対する愛情を失わないことに嫌気がさし、女を捨てるための算段を立てようとしたため。

ウ 男が疑われていることについて、【文章 I】の女は何も知らないままであるが、【文章 II】の女は男のたくらみを見抜いて知らぬふりをしてる。

I 男が別の女のもとに通うことに対して、【文章 I】では女の内心が明確に示されていないのに対して、【文章 II】では女の嫉妬心が明確に示されている。

ウ 【文章 I】では男はもとの女のもとに戻ってきたが、【文章 II】では男は別の女ももとの女と同様に大切にしたいということが書かれている。

E 【文章 I】では二人の女の間で揺れ動く男の心情が詳しく記されているが、【文章 II】では男の心情についてはほとんど記述が見られない。

オ 【文章 I】と【文章 II】は同じような内容の挿話であるが、【文章 I】では男の視点、【文章 II】ではもとの女の視点によって物語が

問4 【文章 I】【文章 II】について述べたものとして最も適当なものを、次の A～オのうちから一つ選べ。

A 男に疑われていることについて、【文章 I】の女は何も知らないままであるが、【文章 II】の女は男のたくらみを見抜いて知らぬふりをしてる。

I 男が別の女のもとに通うことに対して、【文章 I】では女の内心が明確に示されていないのに対して、【文章 II】では女の嫉妬心が明確に示されている。

ウ 【文章 I】では男はもとの女のもとに戻ってきたが、【文章 II】では男は別の女ももとの女と同様に大切にしたいということが書かれている。

E 【文章 I】では二人の女の間で揺れ動く男の心情が詳しく記されているが、【文章 II】では男の心情についてはほとんど記述が見られない。

オ 【文章 I】と【文章 II】は同じような内容の挿話であるが、【文章 I】では男の視点、【文章 II】ではもとの女の視点によって物語が

展開している。

問5 三人の人物が【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】における人物の描かれ方について討論した。次は、その【三人の人物による討論の一部】である。これを読んで、後の問い(i・ii)に答えよ。

【三人の人物による討論の一部】

Aさん 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】のいずれにおいても、別の女のもとに行くふりをして隠れていた男は、女がきれいに身づくろいをして、男を思って和歌を詠むのを目にしているね。

Bさん 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】における、もとの女の描かれ方を比べてみると、Aね。

Cさん そうだね。両者を補い合うと、もとの女についての理解が深まるね。

Aさん 別の女は、もとの女とは対照的に描かれているよね。【文章Ⅰ】では、別の女は、二首の和歌を詠んでいるね。

Bさん もとの女と別の女の詠んだ和歌は、二人の女性の違いをよく伝えていると言えるよね。

Cさん うん。別の女の和歌から読み取れる「B」という気持ちだが、この男の気持ちが離れる要因となったとも言えるだろうね。

i 【三人の人物による討論の一部】の空欄Aに入る語句として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 【文章Ⅰ】では男との夫婦仲の実情が、【文章Ⅱ】では別の女との和歌の優劣が詳しく描かれている

イ 【文章Ⅰ】では男とのいさかいの内容が、【文章Ⅱ】では男と仲直りする過程が詳しく描かれている

ウ 【文章Ⅰ】では男とのなれそめが、【文章Ⅱ】では男を別の女に奪われる心情が詳しく描かれている

エ 【文章Ⅰ】では男への恨みが、【文章Ⅱ】では男に対する恋心が薄れゆくさまが詳しく描かれている

オ 【文章Ⅰ】では男に対する諦めの気持ちが、【文章Ⅱ】では男や別の女を恨む気持ちが詳しく描かれている

ii 【三人の人物による討論の一部】の空欄Bに入る語句として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア あなたが私のところへ来なくなつてから、私のあなたへの思いは日ごと薄れていつている

イ 私から離れてしまったあなたの心を取り戻すことは、きっとできはしないのだろう

ウ あなたが私のことを忘れてしまったのは、もとの女への愛情が深いからなのだなあ

エ あなたのことをこんなにも思っている私のことを、あなたははどうして忘れてしまったのか

オ あなたに会わなくなつてから、あなたが元気で過ごしているか気になつてしかたがない

筒井筒『伊勢物語』／
沖つ白波『大和物語』

年 組 番 氏名

評点

問1	a	問2	
問3	問4	問5	
	b	i	
		ii	

解答解説

筒井筒『伊勢物語』／沖つ白波『大和物語』 〈50点〉

問1 a II イ b II ウ c II オ (各5点＝15点)

解説

- a 「本意」は「かねてからの願い」という意味。「あひにけり」の「あひ」は、八行四段動詞「あふ」の連用形、「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「けり」は過去の助動詞「けり」の終止形。「あふ」はここでは「結婚する」という意味なので、この部分は「結婚した」と訳す。
- b 「いふかひなく」は形容詞「いふかひなし」の連用形で、「ふがいない」という意味。「あらむやは」の「あら」は、ラ行変格活用動詞(補助動詞)の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の終止形で、ここでは意志を表している。「やは」は反語の係助詞で、「ふがいない状態でいられるだろうか、いや、いられない」と訳す。
- c 「ありし」はラ行変格活用動詞「あり」の連用形＋過去の助動詞「き」の連体形で、「かつての・昔の」という意味、「がり」は「…の」とへ…の所へ」という意味である。

問2 エ (6点)

解説

「適当でないもの」を選ぶ問題である点に注意する。

傍線部①の和歌は、直前にあるように、男の「筒井筒…」の和歌に対して、女が詠んだものである。男と女は、前の部分にあるように、「大人」になると「恥ぢかはして」会わずにいたものの、互いに結婚したいという気持ちがあったということとをまずおさえておく。

アの「くらべこし」は、男が和歌で「井筒にかけし」とあるのを受けて、髪の高さを「比べ合ってきた」ということなので、合っている。イの「肩過ぎぬ」の「ぬ」は、完了の助動詞「ぬ」の終止形で、髪が「肩を過ぎた」という意味であるので、合っている。ウの髪を「上ぐ」とは、少女の髪型を頭頂で結って後ろに垂らすことで、女子が成人したことを意味するので、合っている。エ・オの「君ならずして誰か上ぐべき」は、「か」が反語の係助詞、「べき」がその結びで推量の助動詞「べし」の連体形であり、ここでは意志を表しているので、「あなた以外にいったい誰のために髪上げをしましょうか、いいえ、しません」という意味になる。男が「筒井筒…」の和歌の中で呼びかけている「妹」とは、男から愛する女を呼ぶ語であり、ここでは女を指している。男の和歌は婉曲な求婚の歌であると言えることから、女の詠んだ傍線部①の和歌は求婚を承諾する内容となっている。よって、オの内容は合っている。間違っているのはエで、これが正解である。

問3 ア (7点)

解説

傍線部②の前で、女の親が亡くなって貧しくなり、男が河内の女のもとに通い始めたことが書かれている。しかし、「もとの女」は「悪しと思へる気色もなくて、出だしやりければ」とある。つまり、女は、男が別の女のもとに通うようになったのを、不快に思う様子も見せずに送り出したというのである。これに対して、男は女の「異心」、つまり浮気心を疑っているのである。よって、アが正解。

イは「女が経済的に自立する手立てを見つけたせいだと考え」が、ウは「女が貧しいために引け目を感じているせいだと思ひ」が、エは「女が自分に対する愛情を失ってしまったのは、自分が河内の女のもとに通い始めたからではないかと案じ」が間違い。オは本文に書かれていない内容。

問4 イ (8点)

解説

男が前栽の中に隠れて女を見ていたことについて、【文章Ⅰ】も【文章Ⅱ】も女が見られていることに気づいた様子はないので、アは間違い。男が別の女のもとに通うことについて、【文章Ⅰ】も【文章Ⅱ】も女は表面上では穏やかに男を送り出しているが、【文章Ⅰ】ではそのことに対する女の心情の具体的な記述がないのに対して、【文章Ⅱ】では「心地には限りなくねたく心憂く思ふ」「この女、うち泣きて伏して、金椀に水を入れて…湯ふてつ」などの女の心情が分かる記述が見られるので、イが正解。

【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】いずれにおいても、男は別の女のもとへは行かなくなっている。ウは間違い。

【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】いずれにおいても、男の二人の女に対する心情などが書かれているので、エは間違い。

【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】いずれにおいても、男の視点を中心に物語が展開しているので、オは間違い。

問5 i II ウ (7点)

解説

空欄Aには、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】における、もとの女の描かれ方の比較が入る。【文章Ⅰ】では男ともとの女の結婚に至るまでの経緯が詳しく描かれており、【文章Ⅱ】では「風吹けば…」の和歌を詠んだ後、もとの女が金椀の水を胸に当てる様子が描かれ、その水が「熱湯にたぎりぬれば」(＝熱湯となって沸いたので)とあり、このときのもとの女の心情が詳しく表現されていると言えるので、ウが正解。

ア・イ・エのようなことは読み取れない。オは【文章Ⅰ】では男に対する諦めの気持ち「が詳しく描かれている」というのが間違い。

ii II エ (7点)

解説

空欄Bには、【文章Ⅰ】の別の女の詠んだ二首の和歌に込められた心情が入る。男のことを思いやっているもとの女とは対照的に、ひたすら自分の恋心を表現したものであり、エが正解。

ア・イ・ウ・オのような心情はこの和歌からは読み取れない。